

# AO入試はどうあるべきか-早稲田国際教養学部との比較

総合政策学部3年 遠藤 忍 (70701546 / s07154se@sfc.keio.ac.jp)

## 1.はじめに

### i.背景とリサーチクエスチョン

教育機関でありかつ研究機関である大学においては、優秀な学生をいかに受け入れるかが常につきまとう課題である。健全な経営を可能にするだけの学生数を確保しながら、学習／研究活動を熱心に行う優秀な学生を広く受け入れていくには、旧来の一般入試型の入試体系だけでは不十分であると言える。つまり、多種多様な入試形態を採用することで、旧来の学力試験だけでははかれない部分を評価し、その上で入学者を選抜する、という必要が出てくるのではないだろうか。

慶應義塾大学SFCのAO入試も、そうした考えをもとに登場した入試体系であるといえよう。書類審査・小論文・面接によって、本人の学習意欲やこれまでの学習経験、さらに将来のキャリアビジョンなどのポイントによって、SFCの理念と合致し、ここで学ぶだけの能力があるかどうか判断する。このAO入試は、導入以後様々な大学で用いられた入試方法である。しかし、その形骸化からか、「青田買い」入試と揶揄されることもある。しかしながらSFCは、創立以来のこの独自の入試体系を、理念の部分からきっちりと定めてきたため、青田買いのAO入試というのは避けられているように筆者は評価している。その根拠は、筆者自身がAO入試で入学し、多くのAO入学生と接することで理解ができる。

しかし、本当にSFCのAO入試は高く評価されるべき「多様な入試制度」の一つなのだろうか。今後改善せねばならない事柄があるとすればそれはいったいなんだろうか。このレポートでは、

「SFCのAO入試に残る問題点は何か」

をリサーチクエスチョンとして、他大学との比較を元に調査していくものとする。

### ii.調査対象と方法

今回、他大学比較の対象として選択した大学および学部は以下の大学学部である。

- ・早稲田大学国際教養学術院国際教養学部

上記大学学部の選択理由は、科学的根拠ではないが、筆者がAO入試を受験した際にアドバイスを与えてくれた2名の先輩が、それぞれ過去に受験してAO入試で合格した、というものだ。

手法としては、まず大学の実施している「大学自己点検評価」の入試該当ページを参照し、また各大学の公式情報をふまえた上で、上記学部のAO入試制度の特徴を述べる。その上で、SFCのAO入試の特徴を、筆者の体験も交えながら記述した上で、どこを改善すべきかを提言する。

なお、情報の収集にあたっては、できるだけ客観性を保持し、またAO入試という制度の特徴を鑑みて、大学発行の公式情報と本人の体験を頼りにするものとする。なぜならば、各種受験産業の発信する情報や、自分以外の他人の体験談（とくにインターネット等に流布されているもの）については、「大学に入学すること」を主目的とする考え方に傾倒する恐れがあるためである。

## 2.早稲田大学国際教養学術院国際教養学部のAO入試

### i.国際教養学部の沿革と特徴

早稲田大学国際教養学術院国際教養学部（以下、国際教養学部）は、2005年度自己点検・評価報告書<sup>1</sup>によれば、2004年4月に開設された新設学部で、「グローバル化した世界が直面している課題を解決しようとする志をもち、自己の文化の独自性を認識し、多文化社会での共存を目指し、現代の諸科学

<sup>1</sup> <http://www.waseda.jp/kyomubu/hyouka/2005jikotenken.htm>

の基礎を理解し、先端的・学際的学問領域に関心を抱き、自己の思考を発信する外国語能力を有する学生を育成すること」を目的として掲げている。またカリキュラム特徴として「①現代的な教養教育」「②英語による授業を中心」「③学生は1年間海外の大学で学ぶ」「④学生の3分の1を海外から募集」「⑤学生は日本語・英語以外にもうひとつ言語を学ぶ」ということをあげている。

## ii. AO入試の沿革と特徴

同学部のAO入試は、上記のような考え方のもと、2004年の開設当初から実施されてきた。600人の学則定員のうち、AO国内選考4月入学125名(開設当初は150名)、AO国外4月100名、AO9月125名(開設当初は100名)の、計350名が選抜される<sup>2</sup>。これは、学則定員600名に対して半数を超える数字になっている。

選抜にあたっての基準として、自己点検・評価報告書では「志願者の学力を評価の中心に据えつつも、志願者が高校時代に経験してきたさまざまな活動(部活動、ボランティア活動、各種資格試験への取り組みと、その成績など)や本学部への志望動機も併せて評価の対象としている」とし、求める人材像として「問題発見・解決能力の基礎となる思考力や表現力、それらを実行に移すうえでの行動力をも備えた学生」という文言を見ることができる。

## iii. AO入試の形式

では、国際教養学部の入試現状はどのようになっているのだろうか。実は、自己点検・評価報告書は2005年発行で、執筆段階では未完成学部のため、その評価を見つけることができなかった。そこで、2010年4月入学者・国内選考用のAO入学試験要項<sup>3</sup>とApplication Form<sup>4</sup>を参照した。

すると、国際教養学部のAO入試にはおもに3つの段階、すなわち【書類選考】【論述筆記試験】【英語による口頭面接】が実施されることが分かった。

書類選考時に提出を求められる書類は2種類で、一つが前述のApplication Form、もう一つが志望理由書である。特色は、両者ともすべて英語で記述しなければならない点である。Application Formのおもな記述内容は、各種個人情報・学習歴・各種資格やテストスコア・学業や文芸系での受賞歴・個人活動やボランティア歴を記入する欄があるのみである。志望理由書については、英語1000語以内での記述が求められており<sup>5</sup>、使用するフォーマットは特でない。

論述筆記試験は、全国3会場(東京・大阪・福岡)で実施されている。公式情報によるテーマは「Critical Writing」で、時間は150分である。具体的なテーマは示されていないものの、入試要項には「『Critical Writing』とは、与えられた資料を、理解し、分析したうえで、自分の考えを表現する記述形式の審査」と示されてる<sup>6</sup>。

英語による口頭面接については、実施地が早稲田キャンパスであることと、英語による試問がなされること以外に、具体的な分数などについては全く示されていない。

また、出願上の注意として、この学部のAO入試は、「早稲田大学国際教養学部を第一志望とし、入学を強く志す者」ということを第一の条件として挙げていることも特筆すべきであろう。

<sup>2</sup> [http://www.waseda.jp/sils/jp/e\\_student/exam/ao\\_00.html](http://www.waseda.jp/sils/jp/e_student/exam/ao_00.html)

<sup>3</sup> [http://www.waseda.jp/sils/jp/common/pdf/ao\\_4/2010KokunaiAprilGuide.pdf](http://www.waseda.jp/sils/jp/common/pdf/ao_4/2010KokunaiAprilGuide.pdf)

<sup>4</sup> [http://www.waseda.jp/sils/jp/common/pdf/ao\\_4/2010KokunaiApplicationForm.pdf](http://www.waseda.jp/sils/jp/common/pdf/ao_4/2010KokunaiApplicationForm.pdf)

<sup>5</sup> 以下原文、

Write an essay in English of around 1,000 words explaining why you wish to enter the School of International Liberal Studies. You should use your personal experience as the basis for your essay. Please feel free to describe not only what you hope to gain from studying at SILS, but also how you hope to contribute to SILS as an international community.

<sup>6</sup> 受験産業の発信している情報を参照すれば、おそらく過去の問題を参照することができるが、1-iiで述べた方針に従い、今回はここには言及しないこととする。

## iv.数字でみるAO入試

では、実際にはどれほどの学生が志願し、また合格しているのだろうか。

Table.2-1は、4月入学国内選考のAO入試の志願者数と合格者数のデータ<sup>7</sup>である。これを参照すると、毎年出願者数も、また実質倍率も低下していることが分かる。ま

入試年度	志願者	筆記審査受験者(A)	筆記・書類審査通過者	面接審査受験者	合格者(B)	実質倍率(A)/(B)
2009	468	444	172	168	146	3.04
2008	542	512	174	172	145	3.53
2007	618	600	230	228	158	3.80
2006	555	546	184	184	145	3.77

Table.2-1

た、筆記試験合格者から最終合格者に至る間の倍率はそこまで高くないということが分かる。

## 3.SFCのAO入試

### i.AO入試の沿革と特徴

SFCでは、1990年の開設当初から、AO入試を実施している。開設当初から「『個性・独創性・自立性・国際性』、『問題発見・解決能力』を育てる『問題解決のリテラシー』、個別専門(discipline-oriented)から専門領域横断(cross-discipline)型の学問研究への移行などをキーワードとし<sup>8</sup>」てきたSFCは、その開設の理念に沿って、合致する学生を受け入れるための入試方法としてAO入試を実施してきたのである。

慶應義塾の入試公式ホームページ<sup>9</sup>には、「SFCはみなさんに、学部の理念や内容をよく理解したうえで『SFCでこんなことを学びたい』というあなた自身の『問題意識』や『テーマ』を持って入学してくれることを期待しています。」という文言がある。すなわち、SFCのAO入試が重視しているのは、入学後にどのようなテーマを持って学習/研究をしていくか、というところにある。

### ii.AO入試の形式

現行の入試体系は、A方式「学業を含めた様々な活動に積極的に取り組んだ方」、B方式「高等学校での学業成績が優秀で、評定平均値4.5以上の方」、C方式「指定されたコンテストで所定の成績を修めた方」、海外出願「海外在住で海外の高等学校卒業見込みの方」のそれぞれを対象とした入試制度となっており、毎年4月入学・9月入学あわせて両学部それぞれ100名ずつ(定員500に対して)の募集定員を設けている。しかし、各方式による詳細な募集定員の割り振りは存在していない。

A方式とB方式の大きな違いは、1.観点、2.提出書類である。1.観点は、前述の通り、A方式が「様々な活動に積極的に取り組んだ方」を対象としており、コンテストでの成績や各種活動が評価される。一方で、B方式は、そうした活動経験がなくても、「評定平均値4.5以上」があれば出願ができる、というものであり、この点から見ている観点が少し違っていると評価できる。2.提出書類については、各種個人情報・志願者評価書(=推薦書、早稲田にはない)・志願者調書・成績証明書・(そしておそらく最も重要な)原稿用紙(=志望理由書)などが共通して提出するものであるが、A方式の場合、これに加えて自由記述スペースというものがあり、これを使って自己アピールをすることができる。

また、これらの書類は、1200円で購入せねばならないことと、SFCのAOの出願用件には、SFCを第一志望とすることを条件とする記述が見られないことも特筆すべきである。

Table.3-1

<sup>7</sup> [http://www.waseda.jp/sils/jp/e\\_student/results.html](http://www.waseda.jp/sils/jp/e_student/results.html)

<sup>8</sup> 慶應義塾大学2005年大学自己点検・評価報告書 学部 総合/環境 [http://www.tenken.keio.ac.jp/pdf/f-pm\\_ie.pdf](http://www.tenken.keio.ac.jp/pdf/f-pm_ie.pdf)

<sup>9</sup> [http://www.admissions.keio.ac.jp/exam/ao\\_sfc\\_about.html](http://www.admissions.keio.ac.jp/exam/ao_sfc_about.html)

### iii.数字で見るAO入試

さて、数字で見るAO入試は2008年度情報でTable.3-1に示した。高倍率であることが分かる。

	学部募集人員	志願者数(A)	第1次合格者数	最終合格者数(B)	実質倍率(A)/(B)
総合政策学部	100	790	156	115	6.87
環境情報学部	100	606	128	109	5.56

### iv.筆者の入試経験

さて、ここで筆者がAO入試を受けた際と現在の違いについて述べておこう。

まず、当時のA方式とB方式では、面接試験の実施方法が異なっていた。現在では面接試験は30分の個人面接（教員3に対して受験生1）のみであるが、筆者の経験した07年度入学入試では、B方式のみグループディスカッション試験も実施されていた。

また、入試要項では触れられていない志願者調書であるが、当時は様々な活動経験に関してだけではなく、高校のカリキュラム選択や大学後の進路、「自分に影響を与えたメディア」、関心のある問題、自分に影響を与えた体験など、多くの設問について日本語で述べる調書が課されていた。

さらに言うと、面接試験の前に、20分間の小論文試験が課されたが、これに関する質問は面接中には全く触れられなかった。

入学後は、AO入学生は1年後にフォローアップ面接を受ける。しかし私の場合は担当教員との雑談に終始した。また私の入学の前年までは、AO入学者だけのプレゼンテーション大会があり教員との交流があったが、現在は開催されていない。

## 4.SFCのAOは何が問題か

ここまで、長くにわたって、早稲田大学国際教養学部とSFCのAO入試の形態を述べてみた。比較するに、

- ・提出書類の内容および記述言語が違う
  - ・募集定員が異なり、また募集方式も違う。同時に、国際教養学部の募集定員の方が明瞭である
  - ・SFCが書類選考と面接試験のみなのに対し、国際教養学部は論述試験を課している
  - ・出願条件が異なる。とくにSFCは多様な出願条件を課しながら専願を条件としない
  - ・倍率が大きく異なり、また定員数に対して合格者数オーバーするかいなかも異なる
  - ・そもそもSFCは「問題意識」に、国際教養学部は「スキル」「○○力」にフォーカスしている
- といった点が上げられる。

ここから考えられるSFCのAO入試の問題点は、

- ・募集定員に対して倍率が高く、門戸を狭めているのではないか
  - ・その反面、各方式における定員数の設定が曖昧で不透明ではないか
  - ・また、本来は100名である定員をオーバーすることはよいのか（過去もだいたいオーバーしていた）
  - ・同一の論題に対する記述試験を行わず、あくまでも志願者の内面的側面に関する設問が多いため、客観的採点による審査ができていないのではないか
  - ・ということは、入学者の学力を客観的指標で評価できないのではないか
  - ・入学以後に問題意識が変わる学生も多いが、そのことについては何も考えていないのか
- 要するに、「分かりにくい」「謎」の入試と化しており、だからこそAO入試の意味があるのかもしれないが、それにしても不明瞭な点が多いと言えよう。また、比較による結論ではないが、学生に対するアフターケアについても考えるべきことが多いと言えよう。

以上のような点を突破して、「青田買い」と言われるなかで特色あるAO入試を実施している大学の制度をうまく取り入れながら、AO入試の先導者としての責務をSFCが果たしてくれれば、AO入学者としてほっとするところである。